

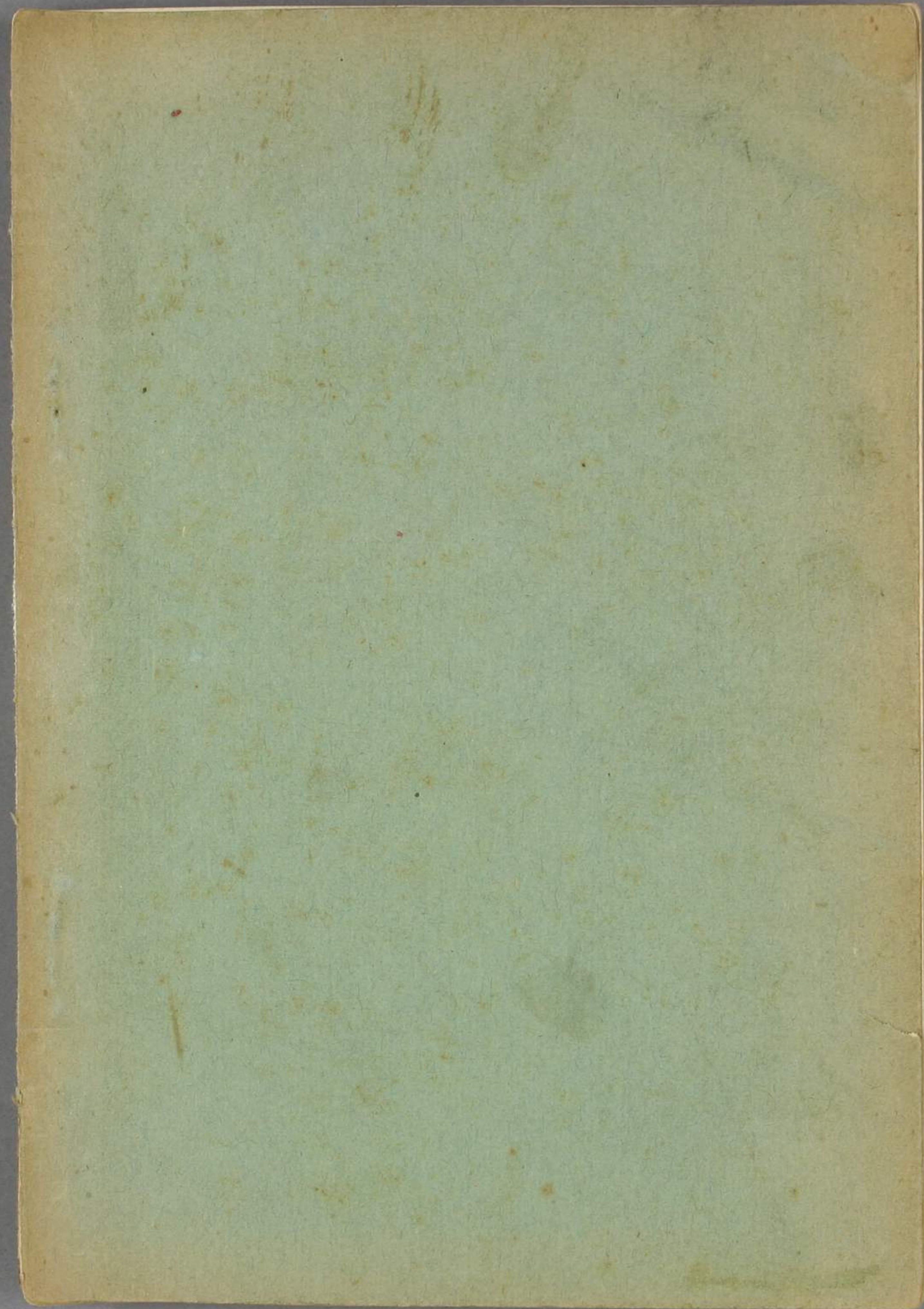
花の色の色
花 褐



村夏越細







作
書
二
二
六
夜

の 褐
花 色

村 夏 越 細

第五集

散文詩十一章
詩十六章

闇

だい／＼色の葉が潮のやうに落ちる。

誰か公孫樹いてよのきに登つて、やけに枝をゆすぶつて居る。その姿は
見えない。

「誰だい？」私は呼びかけた。

「晩秋」その者は答へた。

「なぜ、そんな事をするんだ」私は叫んだ。

乾いた葉がカラ／＼と笑つて居る。

じゃ、あれらは得心づくで、あんな事をやッてるんだ。

また、ひとしきり葉の流れは雪崩のやうに下ろして来た。

私はたまらなく、

「もちッと静かには出来ないのか」と怒鳴つた。

「静かにすれゃ長くかゝるんだ」枝葉の中から冷やかな聲が聞える。

「長くかゝれゃ不可んか」

「ふむ」

「なぜ不可んだ」私は迫つた。

「飽きッちまはうじやないか」

「飽きたら止せ」

「じゃ、お前も死なずに居ろ、いつまでもだ」

「居たいとも」私は反抗を續けた。

「居られるか、馬鹿」落ち付いた聲を残して、その者は何所かへ行つてしまつた。

鬱血した大きな眼のやうな夕日が、泥のやうな雲に啣へられて、さッさと深みへ引き込まれて行く。

寒い夕闇が四方から私に大きな袋を被せる。

「いつまでも生きて居られるか、馬鹿」——思ひ出した先刻の聲をフ、ンと鼻で弾いて、

「生きて居られなけゃ何だ」と私は毒づいた。すると、

「でも、今が今死にきれはすまい！」云つて、暗いものがニヤリと私の鼻さきを突ッ衝いた。

「フム、誰が困るもんか、勝手にして見ろ」私は齒がみをし

て、力の限り兩腕を揮りまわした。

「そら、その通りだ。お前は生の力を笠に着て、から威張を
して居る。ハ、ハ、」笑ひかけて、對手は私には頓着せず、せ
ッせと森の隙間々々を黒く塗りはじめた。

星が燦めき出した。

私は思はず一と足前に踏み出して、

「君、君、僕は心の力で争ふんだ！　おい、君、君！」と、
四方を捜しながら、狂氣のやうに叫びつゞけた。

けれど、いつまで待つても、一と言も返す者は無かつた。
たゞ、私の喚く度ことに、森の奥から、反響は、いかにも力
の無い聲で、私の言葉を私の耳にまで咳き返した。

もう、闇は總てだ。深黙の闇！　この嚴肅と權威！　この謎
は強くて大きい！

ばら畑

夕光の落ちた薔薇ばたけ、
美しさこそ悲しけれ。

葉の枯れそめた林檎の木、

一つ残つた紅い果の
その梢こそ悲しけれ。

白いベンチに、夕雲の茜と、薔薇のくれなゐと、
夕べの陰影と、かなしみと、ほのに映るひ、
秋の日の別れて去にし跡の板。

黄ばめる草の細みちの涯に一日の後ろ影、
えい、うッすと、
泣かせやがるじやないかいな。

うらしま

名も夢を招ぶうらしまの花こそ咲けれ、夢みつゝ、
秋の夕べの静けさに、
雲のまどろむ夕ぐれに。

キユウくと、心に眠り誘ふ、あの、
白エプロンの厨女が静に手繰る金綱の井戸に降り行く際
の歌。

宵と夕べのさかひめに、

顎に指置き物思ふ「時」の姿のゆかしさよ、
闇の扉の前に立ち。

宵と夕べのさかひめに、
静けく憩ふ人の世の夢見心地にあやされて、
うらしまの花こそ咲けれ、うとくと。

連 弾

妹「ねえ、なんてまア、この口は好い聲を出すんでしやう」

姉「そして、また、この齒は何と云ふ美しい白さなんでしやう」

妹「あたし、どうしたって是は生きてるとしきゃ思へないわ」

姉（妹の言葉の耳に入らざりし如く）「こんな軟らかな夜に、こんな、凡てのものを
溶かして仕舞ふやうな聲をして……」

妹（夢みるやうに）「ほんとうに、是は夜そのものゝ聲では無いでしや
うか」

（間）

姉「一体、私どもは、何所に居るのでしやう」

妹「姉さんも私もこのピアノもこの室も、今にも、どうかした
機はぎみに、パッと消えちまふかも知れないわ」

姉（考へて）「だけど、この「夜」だけは、決して、決して……」

（間）

(二人とも恐怖に擴がれる互ひの瞳に見入つたまへ)

姉、(突然妹の手を握りしめて)「春代さん！」

妹、(磁石に吸はれたやうにヒタリと姉に抱き付いて)「姉さん」

(二人は昂まれる、ひとつ鼓動と、逼り喘ぐ、ひとつ呼吸とに顫わなしく)

カアテンを曳いた窓の外には、間を置き／＼、カサ、と枯れ葉の落ちる音が續く。それが止むと、とこしへの旅を行く川水の流れの音が聞えて來た。

青ざめた唇と唇とを推しあて、居た姉妹は、云ひ合はしたやうに、抱き合つたまへ、二足三足よろ／＼と窓ぎわに推し寄つて、カアテンの隙から、眞黒な空を覗き上げ、

姉妹同「アレ、もう星は皆んな死んでしまつた！」

料理場

秋の夜に吹風琴のラツバ節、

葉がバラ、と。

へつひに腰かけた万筋の長むじり、

前に結んだ三尺に朱羅宇の煙管あか／＼と。

角いあぎとに薄ひげの、夜ふけて寒い白おもて、

一文字眉に前髪のちゝれが落ちて、目のふちの薄ら赤味

の腫れぐあひ。

眞鍮しんちゆうの吹風琴を投げ捨て、
あくび交りのトコトット。

表二階の客の間にゲイシャ衆しゆのうたひ弾びき、半玉の笛、
太鼓。

「チヨツ、畜生奴」

水口に葉がバラ、と、
料理場ばの電燈でんきの色のはかなさよ。

湯殿には女中等のくすしと、
ひそめさの生なまぬるさ。

えい、もだくと、胸糞が焼けやがる、
煙いざめの正宗を、氣息もつかずに、ラッパ呑み。

この俺

光と陰かげのだんだらの眞直まっすなな路、
夜のやうに広い自由な街路とほり。

秋の薄い日光に、静謐な生命の音楽が織り込まれ、
白い雲と黄の森と灰色の屋根と青い空。

驚いちゃいけない、

この中に、三味線の色ッぽさ、ピアノのお上品、
産婆も急げば、葬式も通ります。

洋食の臭ひに白煉瓦、

花崗の広いステツプス、

枇杷の葉があをゝと。

こんがらかつた心もち、

式部官見たいな氣にもなり、

村長見たいな氣にもなる。

神も佛も、……そんなどころじや有りゃしない、

まあ一体この俺が

眞人間やら、お化やら。

十月

障子のガラスから、底青い光線の煙の帯が斜めに流れ落ち、
庭には、黄の沁んだ銀色の空気が微動いて居る。

曆の文字のあの「十月」！

私等は、もう、崖の縁まで來たのだ。

尺八が嘆いて居る、ひいろひろくと。まあ何て、聞き馴れた、
けれど新しい悲みだろう。

曆の文字のあの「十月」！

新しい悲みが來た。去年の霜のかゝらない新しい悲みが！

野

黄の芝くれの散らばれる平野の晝の白い夢。

やわらかに、やわらかに、其を踏みしめて、

素跣で私は通る、

謎の森へ。

昨夜の月夜のそよ風のさまよひ行きし細い徑、
緑の蔓の花びらに曙の薄い茜が泌み残り。

銀の泉の泡の歌、

夢の脈搏、

日のまどろみの呼吸^{いき}づかひ、
光線の毛細管のあの^{うね}通り。

朝の十時

痛ましく、君が頬に緑葉の色は映れり、
ロセツチ式のおとがひに、
また、深い眼のほとりにも。

白い柱に蔦の葉の青さと蔓の鶯色と。

君は笑^みまへり、手の上の時計の針に日が落ちて、
朝の十時を指^さした時、
肩に情緒は波打ちて。

夕は黄色の月を産む葡萄の棚を横ぎりて、
君は行く、わななきつゝ、
若い人のユートピアへ。

橋

たそがれの調子の深さ。

空には金の花小さく顫え、
漣の合奏。

水にゆらめく、岸の街路の瞳の影——
濕へる電燈の光の暈の霞み。

黒い橋の上を

人々は星を呑み星を産みつゝ行く。

湖 畔

あめつちの酔へる吐息、
夜曲の情緒こそ、そゞろにも漲り渡りぬれ。

秋の日は空ろに笑ふて、まどろめる蜻蛉は葉末に覺めた。
湖の沖には、釣する人のボートが、だるい心のかたまりのや
うに浮んで居る。

黄芝生の堤の上を、午後の風は、ものうげに、足ずりながら
通つて行つた。その身薄な、かすれた、暗い音を聽きつゝ、

私は、凡てに於て、もはや、やわらかい圓みを失ふた自然を
あはれに思ふた。

やゝあつて、もう一度湖水の秋を眺めまわした時、私は、い
かに、その無感傷の大いさに驚いたろう。

青白い太陽はケロリとして、冷たい空を温めて居る。

斑

白と黒との輝く斑の鳩が、ふいと森の中に飛び込んだ。私は
唯その影の半分のみを見た。ちようど運命の閃めきのやうに。

空氣の濕ッばい森したの路は、大きな蛇の眠つてるやうに、
黄色い光と黒い陰とが鱗を葺いて逆つて居る。

路の兩側の草に埋もれかゝつた低い古い石垣も、ドス黒い花
崗の蠱んだ色と、錆び付いた暗い蒼苔との重くるしい斑の連
なりだ。

なんと云ふ厭な朝だろう。

斑！

私は堪へ得ない嫌惡に顫えすくんだ。

醜穢な斑！ あゝ、是が我等の生の色あひだつた！

あるものは朧ろ夜の自然のやうに、くすんだ秘奥の斑を爲し、
また、あるものは南洋の毒蛇のやうに、鮮やかな、身の毛の
よだつ斑をして居る。

斑！ 斑！ 厭な網目に喘ぐ魚のやうな斑！
おれは、どうすれゃいんだ。
もう手も足も下ろし場が無い。
あゝ、この着物までが、穢い、氣味の悪い、何やらの點々と
筋目とて一杯だ！

24

晩 秋

その暗さ、—— 枯れたる蔦の赤。

滓に凝る血脈のやうな蔓の夢、
惱ましい黙の呻き。

ぼろ壁の腐れた濕氣に
尺八は咽び込み。

壊れ行く秋のすがた、
陋巷の酒場のほとりから。

沖の夕べ

25

夕闇にへだて巻かれた残光の重い赤みが、さめくと、
濕めりたるめる帆の胸に泌み入るさまの遺瀨なさ。

暗い潮の穂がしらの白みを映す、舟べりの窓の女の眼の
玉の乾いた白い薄青み。

黒船は揺られくくって、
厨室の電燈のふるえ、湯氣の渦。

塗網と水夫の足と甲板を轟かす毎、梁桁を滴る、ものゝ
香の露と、悲しき怒鳴り、戯れ歌と、淫らの言と、

エプロンの女の胸へ、手へ、腰へ。

午 後

われは愛づ、ひるすぎの、日入らぬ室の白ざれしほのけ
さを、

その、色も無い、やわらかな悲しみを、
その、乾いたる寂しさを。

やゝ暗く澄める東の窓ガラス、

ひやぐくと陰影^{かげ}沁む庭の静けさに、
立ち木の端^{うら}の黄のほてり、そのうとゝゝさ。

めくら蜻蛉^{とんぼ}が弱々と光の斑^{まだら}を訪ひまわり、
木むらの下の、紫の黒ずめる葉の秘^ひめ嘆き。

午後よ、これらの悲しみと、わが悲みと、ものかげと、
わが懐^{なつ}かしみ、――
えゝ、ほんに、
一寸^{ちよつと}あッさり、泣いて笑つて見たならば。

轍の跡

わだちの跡は日に光り、
さやしに落ちた樺の木の影響を通して、
野の涯へ。
秋の花が咲き。

いくたびか雲の影は徑^{みち}を横ぎり、
川のやうに絶えず行く「時」の流れと、悲しき會^あひと別れ
とを結び解いたろう。

私にも亦た、絶えず、いろ／＼の心が來たり、いろ／＼の心が行く。

ねえ、わだちの跡よ、

私らは一体何の爲にこんな種々の事を味はなけやならな
いんだらう。

たとへば、あの柳の惱み方などは如何だ。

私は、もう、どうしていゝか解らない。

どうしやうたつて、是が如何ともなりやしないんだ。

あれ、石でさへも、あんな苦しそうな顔をしてるんじゃないか。

ちらばり

夕ぐれは一きれの薄い光となり、梨子の木の高い梢に垂
れたり。

なにものか、このころ、見えぬ手をもて、ものみな之餘
命を尺取りて行く。

我れは幾たびか吐息す、

——ホワイ？ 誰か其を知るべき。

たそがれは何時しか満ち、

野のはてに月は覗き、

ものみなは「フ、ム、その次ぎは？」と冷やかに待つ。

その時、右の手と左のそれと何のか、はりか有る、

足と頭とは互に何ものぞ、

我れはバラ、に解かれた心地す。

我れは、そこゝに散らばり居て、一切をその成り行きに任せ、

なにもものをも裁く事なし。

廣

人間は皆な死んでしまつたやうな氣がする。

静かなオルガンの諧調のみが、廣い秋の中を緩やかに流れて行く。

私は彈奏の指を止め、倚子の背に沈んで、題も無く考へ耽つた。

遠い林に微かな斧の音が響いて居る。

あか／＼と日光のさす窓には何の影もうつらない。

……斯うやつて、私は、いつから兩の手に頬を抱へて居たの
 だろう。

鶏が欠伸するやうに啼いて、時計がボン／＼と打つた。

私の眼は、徐かに、その見つめて居た心の空無から歸つて來
 る。

斷章

晴れた秋の青白い微笑！ その淡さ、その薄さ。

老いかゝる美しい女は、窓の下で、抜け落ちた巳が髪すぢを

拾ふて居る。

柿の葉の冷たそうな白い光。

日はもう空の半ばを越えた。

……まあ、どこへ、あんな華美な藤色の傘が行くんだらう。

葡萄

假睡から覺めて、女は、葡萄の一房を摘みあげた。やわらかな腕の白と、珠房の仄かに霞む紫と。

女は、彩濃き夢の曳き残る瞳を通して、いかに長く、おのが

腕の美しさと葡萄の富とに、もう一度その心を酔はせたるう。
 臙脂の黄に光る唇は映え合ふ程に別れ、涼しい薫りの黒髪は
 流れて、枕の刺繡のむら花を漂はせた。

青い畳に、秋の日の光りはしみくと泌み、枕の側の洋本の
 小口の塗金。

隣の室で、楽譜を選りかけた妹が、ピアノの横に頬を見せ、

「ちよいと、……あら、まあ姉さんは又睡っちゃったの」。

……………

けふの日も暮れるだろうか。

窓ぎわ

やわらかな鼻みねの走り、

少女子のこゝろは、かしこに。

蠟塗りの床に、頸の滑らかな花がめ。

あッさりと、情味の深い窓のきわ、

日もほのくと、

乳色のピアノのキイは、夢みつゝ、涙ぐみつゝ、

ド、ミ、ファ、ラ、シ、ドの輪のうねり。

ぼつ、と指を置いては聞き耽る、消え行く音の甘さ憂
さ、
酔と死の搦み。

倚子の肘に頬杖ついて、彼女のこゝろはキイの隙に泌み
て行く。

カアテンは桃色のまぼろしのやうに。

繪はがき

キオリンのやたらびき、

秋の夜のかなしさに。

二十三四の未婚女の咲ききつたウーマンフッドのやるせ
なさ。

「けさから何も食べないで、寝てばかり居たものですから、
また例のですね、塾のママさんに叱られましたのよ」
ひとつ莖から、やさ花の二つ開いたその間に、
「ねえ、これは、何を意味してるんでしやう」。

繪はがきに赤いインキの走りがき、
ハートの中に羅馬字で「もだえの子より」。

読み返し、切手まで貼り、膝立てし、さて、……
「あゝ、あたし、どうしたらいいんだらう」。

涙ぬぐふて、また取り上げたキオリンに
くびれた腮あごの
深くたゞめる物おもひ。

競馬の朝

喫茶園のテーブルに撒き散らされた截りたての草の香ひと銀ぎん
匙しに、秋の日の光は笑窪みくぼをきらめかせ、朝露の泌みたる徑に
紅こうの薔薇らばらの花は盛りうねり、その叢間むらあひに半月形のベンチは
埋うもれてる。

その上に、よき紙の眼ざむるばかり鮮やかに刷られた洋字雑
誌は着色版の挿畫のページを擴げられ、精密な彫刻の満開し
たる寶石を冠いわたせけるステッキと、吸ひさしの葉巻と共に捨て置
かれた。

やわらかい雲の佇む青空と、黄を包む濃綠色の葉林とは、す
べてを會得して、互に頷きつゝ微笑み合ふ。その時に、エン
ジンの賑はしい合奏が聞え、かなたの蔦織れる石塀の角から、
自動車は歡樂の大結晶のやうに膨れ出て、折から、森のうし

ろの競馬場に、いまだ出馬の合圖あひづは、密話からフト破れたる
興笑のあわたゞしさをもて響いた。

42

ハロー！

薄うすの葉が白く光つて、龜裂した地面から、緑の苔が水のやう
に退ひいて行く。

私は高い塔の上から青銅の燈籠の笠を眺めた。

秋の朝の日は、その涼しい光を、事もなげに、ものみなの上
に滑らせて、薄黄色い蝶が自動車の人のやうに翔つて行く。

私は今あらゆる人と物とに對して尊敬の念を禁じ得ない。そ
して又、他愛もなく自分が懐かしく思はれる。

シヤンパンの泡のやうに湧き立つ此の博愛の情感！

ハロー！ ハロー！ 輕快なマーチの口笛で、磨きたての靴
を振つて行く學生よ、

君、ひとつ、自轉車競争でもやつて見やうか。

廊 上

爽やかな雨が、健氣けなげな若い女のやうに、微笑ほほみながら泣いて

43

居る。夜は黒く澄んで。
今宵の燈火の美しさよ。

私は桃咲く頃の軽い心をもて、滑らかな廊下を歩きまわつた。
愛人の室の扉に爲るやうにコツ、とガラス板を敲いて見たり、馬の鬣たてがみに爲るやうにカアテンの綾を撫で、見たり、そして又、或る見えぬ者の笑顔が絶えず我が横顔を見まもつてても居るかのやうに、指と眼と唇とで嬉しい暗號を試つて見たり。

あゝ、私は、かゝる夜の齒切れのよい甘い悲みを如何に好む
だろう。

……や、何故、僕はこゝに立ち止まつて居たんだ？

歩かう、歩かう、喜びは縁ゆちを溢れて、足もとに雫こぼれそうだ。

朝

羅紗の緑に、髪の毛の輪わな状じやうに落ちた、日あたりの、朝の
机のなつかしや。

葡萄の珠の薄肌を透いてルビーの肉は燃ゆ。

美しい記憶こそ湧け、

——花を愛めぶとて、花びらの濃い紅あかみを映うつしける彼の白

い頬のほやかさ。

この思ひ出を紀念せん、
日記には赤いインキもて。
唇は酒盃カッパの唇にまで。

わが戀

赤クロースの表紙には、黄金こがねの光り、
小口には、しろがねの其れ、

——南の空の朝日から。

なかだちの窓のガラスの秘め模様さへ流れたり。

版ばんの廣さを四六とは、チトおどけたる名なるかな、
曲かま一寸の厚さこそ、なぜ斯うも、好すいたらしいと思ひけ
ん、
金きんの模様の背の圓み、弓に似たるも懐かしく。

誰たが何をどう書いたとて、
こんな可愛い姿なまじやもの、
惚おんれいで何としよ、惚おんれらいで……。

刷印日三十二月一十年三十四治明
行發日八十二月一十年三十四治明

錢拾貳金價定

者行發兼作著
三・野賀加内・市岡盛縣手岩
一 省 越 細

人 刷 印
戶番四十三町服吳市岡盛縣手岩
吉 倉 藤 工

所 刷 印
戶番四十三町服吳市岡盛縣手岩
所 刷 印 屋 士 富

所 行 發
三・野賀加内・市岡盛縣手岩
樓 書 々 悠



7
20

✓

2